

# 関西菌類談話会会報

1986年 5月 No. 1



## 発刊の辞

本郷次雄

日本菌学会関西談話会から生まれ変わった関西菌類談話会は、発足以来4年目を迎え、会員数が400名を越す大世帯となった。さてここ10数年来、全国各地に同好会的な菌類の団体があいついで誕生し、また菌類関係の図書が年に何種類かは出版されるようになった。私が約40年前、菌類の研究を始めたころを思い返せば、まさに今昔の感に打たれるしだいである。

各地に生まれた上記諸団体は、性格においてわが談話会とはかなり違っているであろうが、中にはりっぱな会誌や出版物を出して、地方文化の発展に大いに貢献しているところもある。このような事情から、談話会会員の間で2、3年前から、「会誌を発行しては」との声がしばしば聞かれるようになった。そして1985年度からの会費値上げを機にこの話は具体的となり、編集委員諸氏のご努力でついに創刊号の発刊にいたったことは、まことに喜ばしい限りである。本号はわずか8頁のパンフレットにすぎない。しかし日本菌学会会報も8頁から出発した。会員たちの努力によって、将来日本に誇る会誌に発展してほしい、というのが私の夢である。

# 関西菌類談話会の歴史

吉見 昭 一

関西菌類談話会の約30年の歴史を運営面から見ると、(1)創設期(1958年～1968年)、(2)伸展期(1969年～1982年)(3)改組期(1983年～現在)の3期に分けられる。

(1)の**創設期** 昭和33年(1958年)当時、京都大学農学部応用植物教室の故浜田稔先生の提唱で、京大楽友会館での発会から始まる。先生は菌類に関心のある人、菌類関係の研究者、趣味・興味を持つ好事家や菌類栽培家を問わず、菌類についての研究や啓蒙、親睦と研究交流をしようではないかと同志を相集い、講演会やシンポジウム、菌食会や採集会などを行うことを決めて発足したのである。会の名称を『日本菌学会関西談話会』とし、当時の写真などから、小林義雄、今関六也、印東弘玄、本郷次雄、鈴鹿紀、桂崎一、西門義一氏等、斯界の主要な方が加わっていた。

当初より10年間は会員ほぼ固定し、少人数であった。殆んど大学・研究所関係で、浜田先生が庶務的な仕事もされた。昭和38年から庶務の手伝いをしはじめ、昭和40年初頭、名簿作成をすると、わずか49名であった。年間、講演会、シンポジウム、採集会など8・9回の事業を行い、酵母研究会と共催することがあった。当時は葉書が5円の時代で通信や諸費をあわせても年間6000円ほどで決算ができたのである。主な採集地は清水山、滋賀大教育学部裏山、大文字山、田上山などであった。とりわけ春日山一帯の菌類調査や芦生演習林の菌類調査は連続して行われて当時の方々の記憶にあるところである。

昭和43年(1968年)に会員の急増があり、アマチュアといわれる趣味・興味関心のある人たちが集まるようになった。そこで、はじめて会員冊子を作成し、会員名簿に会員数183名を掲載した。

(2)の**伸展期** 1968年第63回日本菌学会関西談話会は満10周年記念として、京都大学楽友会館において浜田稔先生のよもやま話の講演と『微生物の生態』シンポジウムI、II、III、が始められ、2年間続けられ、これよりテーマをきめて行われるようになった。

採集会も多方面となり、鞍馬山、醍醐三宝院、三井寺、田上山、大文字山、円山清水山、鷹ヶ峯千束、岩倉市原野、吉田山、醒ヶ井、京都大学植物園、上賀茂試験地、石清水八幡宮、箕面公園、三上山、稲荷山などあげられる。また宿泊採集会は芦生演習林

で4泊5日の期間であったが、親睦交流が多くなる頃から3泊4日と変わった。1967年は三重大学平倉演習林となったが、再度翌年芦生演習林となった。ついで5年間1969年より1973年まで連続で大台ヶ原方面の菌類調査を『山の家』を中心として、3つのコースを決めて調査した。『山の家』を貸し切るほどの人数であった。発会して、年末には年間の採集会等のスライドを映写したり、講演会を開いたりして、忘年会を兼ねて行っていた。昭和41年(1966年)から熊野会館で恒例スライド大会を懇親会という形に定着し、8年間引続いて行われ、会館火災に遇い、1974年より田中神社弘安殿で行われ、現在まで12年間続けられている。この伸展期に、キノコ採集会を兼ねて、マツタケ鍋を三上山麓の妙光寺山で4回行ったことや、1974年10月、京都府立植物園で、植物園・京都園芸倶楽部共催で大ががりな『キノコ展』を開催したことがあった。中央にマツタケ山を配し、キノコの分類、食毒、栽培キノコ、料理法など展示し、講演会を行った。1975年より『分類学講座』を開始し、毎年5月に行っている。宿泊採集会は大台ヶ原に続いて、鳥取大山(1974年より1977年)に4年間、ついで丹後半島太鼓山(1978年より1980年)の3年間、そうして再び大台ヶ原山(1981年～1984年)の4年間が続いた。

この間飛躍的に会員が増加し、350余人となった。

この会の創始者であり、総括者であった浜田稔先生が1981年9月他界され、京都大学植物病理教室山本昌木先生が2代目会長として一層役割分担の明らかな組織づくりをされた。会費未納の会員が多かったので、会員の再登録を行い、会員196名となる。1984年3月には279名となり、会の運営について討議を重ねた。

(3)の**改組期** 伸展期の事務は横山和正、鈴木彰、本郷次雄、小原弘之氏らで進めてきたが、1983年に『関西菌類談話会』の名称にかえ、ついで事務局を横山竜夫氏(発酵研)におき、会則を作り、役員会を決めた。1985年2月総会で、滋賀大学教育学部生物教室本郷次雄先生が3代目会長を引継ぎ、会員は405名となった(1986年2月現在)。運営の機構が明確化し、会員、役員および任務分担を決めた。第208回、第212回、第220回、第232回は講演要旨集が出ており、宿泊採集会は奥伊吹で行い、分類学講座も10回を数えるにいたった。このように関西菌類談話会は各種の事業を継承しながら、組織の効率化を考えて、一層内容の充実、発展を図っている。



# キノコを見に行ったらキノコが見られなかった話2題

山本昌木

## I タスマニア島へキツリヤ菌を見に行った話

*Cyttaria* 菌は、南米の南部からニュージーランドにかけて分布する *Nothofagus* (ナンキョクブナ) 属植物上にグミの果実のように群生する菌で、現地の人には食用にするという。小林義雄先生が採集して来られたこの珍奇な菌の姿に接したとき現場で観察してみたい気持ちになった。1970年南米を訪れたが、チリー・アルゼンチン・パラグワイなどでは見ることができなかった。1981年第13回 国際植物学会議がシドニーで開催されたので、タスマニア島まで足をのばし、この菌を観察したいと思った。

8月27日 タスマニア島行きのためシドニーで毛皮購入。8月は現地では真冬である。28日6時15分シドニー空港ロビーに同行者集合。7時30分出発。9時45分ホバート空港着。タスマニア大学植物学教室ジャクソン教授より植物観察についてのオリエンテーション。今まで何回も海外に出かけているがこんなわからない英語を聞いたことがない。めん密なフロア調査図を渡される。ユーカリ樹や木生シダが多い。30日 ノルトフォークのモーテルに泊る。31日 フィールド山 (Mt. Field) 国立公園で高層湿原の植物観察。山々には雪。このあたりの *Nothofagus* に2種類あり。現在葉のついていない方の *Nothofagus* に夏期 *Cyttaria* 菌が着生するものらしい。しかし現在葉の出ている植物にも少し膨らんだ部分が見られるので、帰国後調べてみたいと思ったが、その後も多忙のためそのままである。私共を運んで来たマイクロバスは、みぞれの降る高層湿原に私共を放置したまま帰ってしまった。2時間ばかりふるえながら歩く。最近、近畿大学衣川堅二郎教授の特別のご配慮で、チリー国の Punta Arenas, Puerto Bulnes において、1986年1月26日 *Nothofagus* 茎上で採集された *Cyttaria* 菌の標本を頂いた。今後、南米やタスマニア島にもしも行く機会があれば、夏に *Nothofagus* の茎上で *Cyttaria* 菌をくわしく観察したいものだ。

## II 釈迦死亡の原因菌をみるためインド・ネパールを訪れた話

釈迦の死亡の前日、パーバー村の鍛冶工チュンダのさし上げたスーカラ・マツダバ (Sūkara-maddava)

を食べて赤痢のような症状となり、クシナガラで死去されたといわれる。このスーカラ・マツダバ については、柔い野猪の肉説とキノコ説とがある。もし、キノコであるとすれば、釈迦が生れ、悟りに入り、説教して廻り、そして死去した場所のあたりにどんなキノコが生えているのか見てみたいと思い、インド・ネパールを訪れることにした。

1984年3月7日 3時55分、大阪空港発 (インド航空は時間がルーズで数時間遅れるのはふつうと聞いていたが、予定時刻より20分も早く離陸してしまったのには啞然)。現地時間23時 カルカッタ着。(日本との時差3.5時間。私のデジタル時計では最後まで暗算が間に合わなかった)。昼間はカルカッタ市内見学。カルカッタ駅を23時発の豪華列車 Rover 号に乗り込む。夜行列車専用の盗賊が出没するとかで武装警官が警戒して呉れた。同行者は仏教関係者が多く、列車内のラウンジの釈迦の像にはキク (菊にあらず) のレイが懸けられている。9日朝ガヤに着くとライター、ボールペンを呉れとせがむ人の群。ラジギール (霊鷲山) に登る。私共一行の前後を武装警官が警備。ナーランダ (ハスの花の意) は昔の仏教大学の跡。赤煉瓦が美しい。森蔭や路傍を一生懸命キノコを探し廻ったが全くみつからない。日本山妙法寺でお茶の接待。方丈さんに聞くと、今乾期だからキノコは全くないが、雨期には沢山発生するという。ブツガヤのマハボディ寺を訪れる。釈迦の悟りを聞いたという大ボダイ樹あり。この樹はスリランカよりあとで移植したものとか。尼連禅河 (ナイランジャ河) の対岸には2峰の前正覚山がみえる。10日ベナレス (現地ではワラナスという) でヒンドウ教徒のガンジス河での沐浴を見学。サルナート (釈迦が初めて説教したところ) も訪れた。アショークの並木。マンゴーの樹。11日ゴラクプールで車を降りバスでネパールの国境を越える。手続面倒。毎日キノコを探し廻っている私をあわれに思ったのであろうか、同行のインド人 Mahajan 氏がこの地方の住民が食べると称するキノコの塩漬を一瓶呉れた。一見マッシュルームのようであった。

今度インドやネパールを訪れるときは雨期にキノコが沢山生えている状態を眺めたいものだと思う。



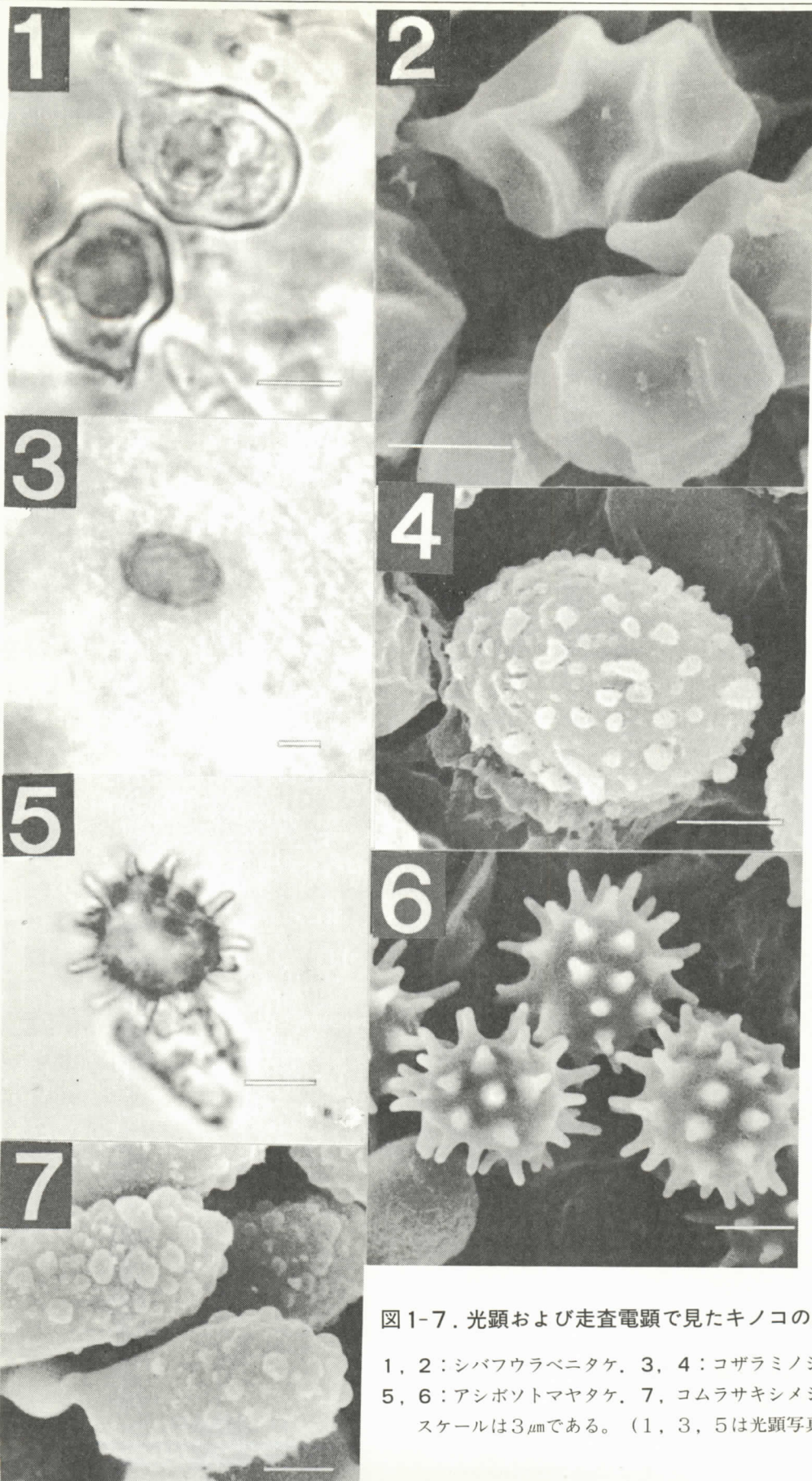


図1-7. 光顕および走査電顕で見たキノコの孢子

1, 2: シバフウラベニタケ. 3, 4: コザラミノシメジ.  
 5, 6: アシボソトマヤタケ. 7, コムラサキシメジ  
 スケールは3 $\mu$ mである。(1, 3, 5は光顕写真)



# 光顕および走査電顕で見た2,3のキノコの胞子について

下野 義人

キノコの胞子の表面は平滑なものが多いが、トゲ状、イボ状、あるいは峰状の突起等をもつ種もある。近年、走査電子顕微鏡（以下走査電顕とする）の発達に伴って、容易に胞子表面の構造が観察できるようになり、トゲ状突起の形態やそれらの間を結ぶ連絡脈の状態などが分ってきた。

ここでは、胞子の形や表面構造に特徴のある、2,3のキノコの胞子を光学顕微鏡（以下光顕とする）や走査電顕で観察し、走査電顕の有用性にふれる。

材料のキノコは、ここ数年間に、大阪府立高槻南高校（高槻市芝生町）の構内で発生したものである。

図1, 5は微分干渉顕微鏡、図3は普通の光顕、図2, 4, 6, 7は走査電顕を用いた観察結果である。シバフウラベニタケのように、胞子の形に特徴のあるもの（図1）や、アシボソトマヤタケ（図5）のように、胞子の表面のトゲ状突起が大きいものは微分干渉顕微鏡を用いて観察すれば、かなり細部ま

で識別できるようである。しかし、コムラサキシメジやコザラミノシメジ（図3）のように、小さなトゲ状～イボ状の突起がある場合は、微分干渉顕微鏡を用いても、胞子表面の状態を知ることは困難である。

一方、走査電顕では、シバフウラベニタケのように、胞子が角ばっている様子（図2）や、アシボソトマヤタケのようなトゲ状突起、そしてコムラサキシメジのように小さなイボ状突起（図4, 7）であっても鮮明に観察できた。

これらのことから、胞子の表面に大きな突起があるとか、胞子の形に特徴がある場合には、光顕であっても油浸レンズをつけた微分干渉顕微鏡ならばかなり細部まで識別できる。しかし、表面のトゲ状やイボ状の突起が小さい場合には、走査電顕を使用しないと識別は困難である。その場合の倍率は2000～3000倍が良いと思う。

## 1986年度 関西菌類談話会行事計画表

■第233回 5月18日(日) 分類学講座（第11回）  
服部 力氏（京都大学・農・林学）：「サルノコシカケの分類」

京都府立大学付属図書館視聴覚室(10:30~12:00)  
昼食後、同大学付属農場内で採集(13:00~15:00)  
世話人：藤井昭治・吉見昭一両氏

■第234回例会 6月29日(日) 伏見稲荷採集会  
伏見稲荷大社参集殿に集合(10:30)  
世話人：吉見昭一・森本繁雄両氏

■第235回例会 7月12日(土) シンポジウム  
世話人：藤井昭治・衣川堅二郎・田中昭子・上田俊穂各氏

\* 詳細は別途お知らせします。

■第236回例会 7月27日(日) 箕面公園採集会  
阪急電車箕面駅前集合(10:30)  
世話人：上田俊穂・高山 栄両氏

■第237回例会 8月22日(金)~25日(月) 富士山採集会(3泊4日)  
世話人：横山和正・井坪豊明・横山竜夫各氏

\* 詳細は4月上旬頃に別途お知らせします。本会員及びその家族で、申込者のみ参加できます。

■第238回例会 9月23日(火) 私市採集会  
京阪電車私市駅前集合(10:30)  
世話人：上田俊穂・下野義人両氏

[注] 9月21日(日)の予定でご案内を差し上げておりましたが、都合により変更(日延べ)します。

■第239回例会 10月12日(日) 京大演習林上賀茂試験地採集会

京都市北区上賀茂本山2 京都大学農学部附属演習林上賀茂試験地事務所前集合(10:30)  
世話人：加藤景生・吹春俊光両氏

■第240回例会 11月2日(日) 滋賀県希望ヶ丘文化公園採集会  
滋賀県野州町 西入り口より入り、ユースホテル前集合(10:30)  
世話人：太田 明・橋屋 誠両氏

■第241回例会 12月14日(日) スライド大会  
京都市左京区田中樋口町1 田中神社弘安殿(電話075-781-9274)(10:30~16:00)  
世話人：横山和正・橋屋 誠両氏

\* 各自スライドを御用意下さい。

■第242回例会 1987年2月7日(土) 総会及び大会(講演会)  
世話人：藤井昭治・衣川堅二郎・田中昭子・上田俊穂  
\* 詳細は12月頃に別途お知らせします。各氏奮って講演発表をお願い致します。講演申込みは、11月30日まで、事務局で受け付けます。

申込宛先

〒532 大阪市淀川区十三本町2-17-85

財団法人発酵研究所真菌研究室内

関西菌類談話会事務局

電話 06-302-7281

# 談話会会員の採集した珍しいキノコ (1)

横山 和正

最近談話会会員の採集されたきのこで、同定を依頼されたり、標本をいただいたものの中から、面白そうなものをひろってみます。私は1984年のすえに南米ペルーの調査から帰って、1985年1～4月に体調をくずし、同年11月末には宿舎を変わったりであわただしくすごしました。たくさんの標本をおあずかりしていますが、まだ全部調べ終わっていません。順次調べたいと思っています。

## 1. スナヤマチャワンタケとスナジクズタケ

本多澄夫さんの採集された砂丘のきのこ2種を紹介します。愛知県豊橋市小松原町の砂丘で1983年11月14日に採集された上記の2種は真の意味の砂丘生の菌類です。前者は子のう菌でチャワンタケの仲間です(図1a)。砂丘の細かい砂が風で流され、このきのこは埋まってしまうこともあるようです。子実体の直径4～5cm、内面は紫褐色。胞子は子のうの中に8個形成され、だ円形、 $15-17 \times 8.5-10 \mu\text{m}$ (図1b)、学名は *Peziza ammophila* Durien et Montagne といいます。ammophila とは砂(ammo)を好む(phila)というギリシア語に由来したことばです。

大谷吉雄先生にこの標本(4309)の一部をお送りしたところ、本多さんの標本は太平洋側ではじめての採集品であるとの返事をいただきました。

後者は松田一郎氏によりスナジクズタケと命名されたきのこで(新潟県のキノコ p.172 参照)、波うちぎわに最も近い砂丘に生えるムジナタケに似た小型のきのこです(4308)。くさった植物の遺体から生えています(図2a)。かさの径2cm位、柄の長さ3cm位、胞子の色は紫褐色、 $9.5-11.5 \times 6-7 \mu\text{m}$ (図2b)、緑シスチジアは $47-63 \times 14-16 \mu\text{m}$ (図2c)。学名は *Psathyrella ammophila* (Dur. et Lév.) Orton です。

なお上記の2種は念のため砂丘の菌類を専門に研究している、フランスの R. Courtecuisse 博士に送って同定してもらった結果、両種ともまちがいないとの返事をもらいました。

スナジクズタケは1985年11月8日、日本海側の京都府網野郡箱石海岸の砂丘でも山脇誠史さん(京都教育大学4回生、1985年当時)が採集しておられます(4726)。両種とも砂に埋った柄の部分は細かい砂を全面にびっしり着けています。

## 2. テングタケの白色型

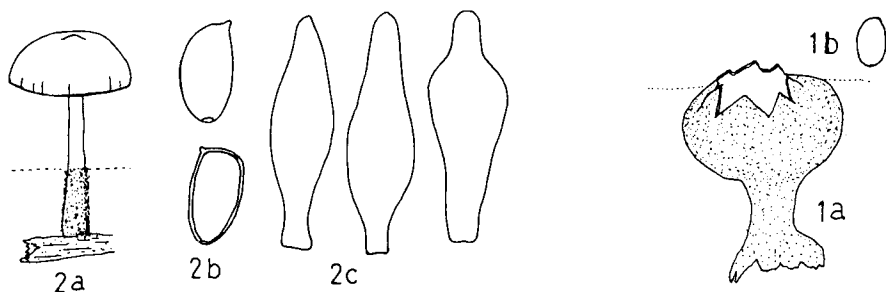
これはペンションきのこの小宮山勝司さんが菅平に隣接する峰の原高原附近で採集された白色のテングタケです。数年前からシラカバ林に出はじめたとのことで、現在は1か所しか出る所がないそうです。標本(4285)と写真、それに奥様の描かれたみごとな水彩画(9月18日描く)をいただいています。なぜテングタケと考えたかという、きのこ全体が白っぽい(純白ではなく、“ハール”)が、外観がテングタケそっくりで、胞子も非アミロイドで、テングタケの胞子と形、大きさが同じです。学名は *Amanita pantherina* f. *albida* R. Schütz ではないかと思えます。albida は白っぽいという意味のラテン語です。テングタケの白色型の一品種と考えられます。和名をシロテングタケとしますと、すでに食用の *Amanita neoovoidea* Hongo があり、混乱しますから、テングタケの白色型としておきます。何かよい名前があったら考えて下さい。

## 3. ツルタケに似た変なきのこ

茨木吉之助さんが1985年10月1日に国鉄大津駅の裏の国有林(マツ林)でツルタケによく似たきのこを採集し、研究室に届けて下さいました。胞子が、 $12-13 \times 9-10 \mu\text{m}$ とツルタケにくらべてやや卵形です。最近イタリアから出版されたテングタケの図鑑\* p.44の *Amanita malleata* Piane にそっくりです。標本(4579)が不完全だったので再度お目にかかりたいと思っている次第です。

\* Erica G. Merlo, Mido Traverso 著 *Le Amanite* 151pp. Sagep Editrice, Geneva 1983

(1986. IV, 12 記)



# 関西菌類談話会会則

## 〔名称〕

第1条 本会は「関西菌類談話会」（以下「本会」と称する。  
英語名を KANSAI MYCOLOGICAL CLUB とする。

人または団体

- (3) 名誉会員 本会に特に功勞のあった者
- (4) 会友 上記以外で本会が必要と認めたる者

## 〔事務局〕

第2条 本会は事務局を下記に置く。  
〒532 大阪市淀川区十三本町2-17 85  
財団法人発酵研究所真菌研究室内  
TEL. 06-302-7281  
振替口座番号 大阪 5-83129

## 〔入会および退会〕

第7条 本会に入会を希望する者は、所定の入会申込書に必要事項を記入し、当該年度の会費を添えて本会事務局に申し込むこととする。  
また退会する者はその旨文書で本会事務局に届け出ることとする。

## 〔目的〕

第3条 本会はきのこ、かび、酵母等菌類に興味をもつ人が、菌類を通して自然に親しみ、菌類の調査、研究、利用、保護などのためお互いに協力しつつ、知識、情報、技術などの交流を計ることを目的とする。また、会員相互の親睦と菌類についての啓蒙を行う。

## 〔役員および任務〕

第8条 本会に次の役員を置く。

- (1) 会長1名 本会を代表し、会務を統括する。また総会および役員会を召集し、その議長および書記を委嘱する。
- (2) 副会長2名 会長を補佐し、会長に事故あるときはその任務を代行する。
- (3) 総務幹事1名 事務局を担当し、本会の受付事務全般を行う。
- (4) 庶務幹事2名 会務全般を行う。イ、ロについては分担する。  
イ、採集会事務を担当する。  
ロ、会員名簿、集会事務を担当する。
- (5) 会計幹事2名 会計事務を行う。イ、ロについては分担する。  
イ、経理、現金出納を担当する。  
ロ、会費請求・領収事務を担当する。
- (6) 運営幹事若干名 本会の事業の立案、実施を行う。イ、ロについては分担する。  
イ、採集会を担当する。  
ロ、集会を担当する。
- (7) 会計監査2名 会計事務の監査を行い、総会に於いてその結果を報告する。
- (8) 会報編集委員若干名 会報編集委員会を構成して編集委員長を選出し、会報の編集ならびに発行を担当する。

## 〔事業〕

第4条 本会は上記の目的を達成するために次の事業を行う。

- (1) 菌類の野外観察会、採集会
- (2) 菌類の同定または鑑定会
- (3) 菌類の同定、分類、生理、遺伝、生態、利用などに関する講演会、講習会、研究会、展示会、研修旅行
- (4) 菌類の分布調査、標本作製、分離・培養、資料・会報などの作成と会員への配布
- (5) 他の関連団体との交流
- (6) その他本会の目的達成に必要な事業

## 〔会員〕

第5条 本会は菌類に興味をもつ個人および本会の目的に賛同する個人および団体により組織する。

第6条 本会の会員は下記のように定める。

- (1) 通常会員 第14条(1)に定める会費を納入する個人または団体
- (2) 賛助会員 本会の目的に賛同し、第14条(2)に定める会費を納入する個

第9条 本会には必要に応じて顧問若干名を置くことができる。

〔役員会〕

第10条 役員会は会長の召集する会員をもって構成する。

〔役員選出および任期〕

- 第11条 (1) 会長は役員会の推薦に基き、総会で出席者の過半数の賛成をもって選出する。
- (2) 副会長、その他の役員は会長が委嘱する。ただし、副会長は会長が必要とする場合にのみ委嘱することができる。
- (3) 役員 任期は2年とする。ただし、再任を妨げない。
- (4) 役員に欠員が生じた場合はその補欠を行う。ただし、補欠された役員任期は前任者の残任期間とする。

〔総会〕

第12条 総会は年1回会長が召集し、役員選出、予算、決算ならびに本会の事業実施上の重要事項について、出席者の過半数をもち議決する。総会の議長および書記は会長が会員中から各1名を委嘱する。会長が必要かつ緊急と認めた場合には臨時に総会を開くことができる。

〔経費〕

第13条 本会の経費は会費、寄付金、預貯金利息その他をもってこれに当てる。

〔会費〕

第14条 本会の会費は下記のように定める。

- (1) 通常会員 年額 1,000円  
(2) 賛助会員 年額 5,000円

第15条 会費は前納制とする。ただし、一度納入した会費は返還しない。

会費を3年間納入しない場合は退会したものと見なす。

第16条 講演会、採集会その他の集会に於いて、必要に応じて参加者から参加費を徴収し、必要経費に当てることことができる。

第17条 本会の会計年度は毎年1月1日に始まり、12月31日に終る。

〔付則〕

- 第18条 (1) この会則の改正および本会の事業実施上の重要事項の改廃は役員会で審議し、総会に於いて出席者の3分の2以上の賛成を必要とする。
- (2) その他本会則に定めのない問題は役員会に於いて処理し、総会に報告し承認を得ることとする。
- (3) 本会則は昭和58年10月8日より施行する。

(昭和61年2月1日一部改訂、同日より施行)

### 表紙写真解説

ニセアシベニグチ *Boletus pseudocalopus* Hon-go

アカマツ・コナラ林やシイ林に多くみられ、7月頃からイグチ類の先頭を切って登場するきのこの一つである。時には傘の径20cmにも達する大型種で、その群生するさまは見事である。

傘の表面は淡黄褐色～淡紅褐色、管孔は傷つくと青変するが、変色性はイロガワリほど強くない。肉はほとんど変色しない。柄は黄色の地肌に赤色を混じえる。本郷次雄教授が1972年に新種として発表され、今のところ分布は日本に限られるが、将来は近隣諸国でも見つかる可能性がある。

このきのこを食べた人の話によると、非常に美味とのこと、ぜひ試食をおすすめしたいきのこの一つである。

(写真と文 村上康明 在スイス)

### 編集後記

色々な御意見をどうかお寄せ下さい。会員の皆様の投稿をお待ちしています。

投稿された原稿は、原則として誤字以外の訂正はしておりません。予算の関係上、次号の発行は次年度になります。

◇ 投稿先

〒617 長岡京市西の京14-2

上田俊穂 あり

関西菌類談話会会報 No. 1

1986年6月 7日印刷  
1986年6月14日発行

発行人 本郷次雄  
編集 関西菌類談話会会報編集委員会  
発行所 関西菌類談話会

事務局 〒532 大阪市淀川区十三本町2-17-85

菌発酵研究所真菌研究室内  
電話 06-302-7281  
振替 大阪 5-83129

印刷所 橋本印刷  
〒600 京都市下京区松原通御前東入下ル